

はじめに

いま、アフリカが注目を集めている。世界でも日本でも、アフリカの過去、現在、未来について語るうとする人びとが、着実に増えてきているようだ。理由はいくつかある。

一つは、二一世紀に入って、世界の中のアフリカの地位が上昇してきたことだ。二〇世紀の後半、アジアの国々が経済的に離陸する一方、アフリカはひとり取り残されたかのように見えた。しかし、近年、様子が変わってきている。二〇〇〇年代の最初の一〇年間のアフリカ諸国の経済成長率は平均五%ほどで、中国には及ばないが日本よりずっと高い。携帯電話の普及率は一〇人に四人に達しており、まだまだ伸びそうである。アフリカは世界経済の「最後のフロンティア」なのかもしれない。日本の企業関係者にも、中国、インドの彼方のアフリカに市場機会を見る人たちが生まれてきた。

他方では、そのような可能性にもかかわらず、同時代のアフリカはいまだに多くの深刻な問題を抱え込んでおり、ひとつの地球で暮らす同じ人間として放っておけないということがある。近年の輸出主導のバブル的な経済成長が、アフリカをかえって不安定にしている面もある。底辺層の所得は伸びず、各国で貧富の格差が開く傾向にある。エイズやマラリアなどの疾病は、アフリカで暮らす人びとの暮らしを脅かし続けている。表面的には平和だが、暴力的な紛争の再発の可能性がある国も多い。

アジアが援助の受け取りを「卒業」するにつれて、次の人道援助の焦点はアフリカになるという意見をよく耳にするようになった。NGOでも、JICA（国際協力機構）などの援助機関でも、アフリカの問題に取り組む人たちが目立って増えてきている。

経済成長と人道問題。言ってみれば、アフリカの光と影が世界の注目を引きつけているわけだ。しかし、それだけではない。人びとがアフリカに注目する三番目の理由として、アフリカという「空間そのもの」が私たちを引きつけてやまないということがある。たとえば、日本アフリカ学会には八〇〇名の会員がいて、農学や文学、人類学や地質学、経済学や医学など、実に幅広い分野でアフリカを研究している。援助やビジネスでアフリカにかかわる人たちも、少し時間がたつと、アフリカの魅力にどっぷりと浸かりはじめる。

とっかかりは何でもいいのだろう。だが、編者としては、アフリカに関心を持ちはじめたばかりの人たちにこそ、アフリカの多面的な魅力をまるごと感じとってほしいと願っている。アフリカが好きなのは、アフリカを一方的に変えようとはしないし、アフリカを利用して自分だけが利益をあげようともしない。むしろ、自分が出会ったアフリカとの関係を大切にしながら、アフリカ人に自分が感じたことを伝え、変化するアフリカに寄り添い、アフリカの経験から学び、自分の生き方を反省していくはずだ。その結果、自分の価値観が大きく変わってしまうこともある。

実際、アフリカとかかわっていると、立ち止まって考え込んでしまうことが、よくある。そのきっかけは、村人のつぶやきであったり、留学生の質問であったり、ミュージシャンのメッセージであっ

たり、哲学者の文章であつたり、バスの乗客やタクシーの運転手との世間話だつたり、ビジネスマンや外交官との会話であつたりする。思いがけないところで、アフリカ人の怒り、笑い、沈黙、ときには涙に出会う。自分の振る舞いは相手にどう受け止められたのかな、と反省することもある。編者のようなアフリカ研究者たちは、アフリカの文化や制度、政治や経済について、大きな「しくみ」の文章を書くことが多いが、その場合でも、こうした日常のつきあいの中で考えたことが、書いていくことの中身を左右することになる。

私たちは、そんな学び、気づき、省察のプロセスに一人でも多くの読者を巻き込みたいと願って本書を編んだ。だからこそ、本書のタイトルは「アフリカから学ぶ」になっているわけである。どんな素材から何を学ぶかについては、それぞれの章を実際に読んでみていただきたい。基本的なことを知っておいてほしいという思いから、執筆者たちは教科書的な硬いことも書いていくけれど、それぞれの章のコアにあるのは、「自分はアフリカからこんなことを学んだけれど、皆さんはどうですか」、というメッセージである。

* * *

これからページをめくっていく読者の方々の理解を助けるために、ここで本書の構成と特徴について簡単に説明しておくことにしたい。

まず、冒頭の第Ⅰ部には歴史に関する章を配置した。アフリカは「歴史のない大陸」と見なされが

ちである。アフリカの人びとは概して文字よりも口頭伝承による記録に重きを置いてきたこと、そして、西洋史と東洋史が日本の学校の歴史教育を独占してきたことがあって、一般の読者に提供されるアフリカ史の情報は大いに不足している。だが、相手の「生い立ち」を知ることが相互理解の第一歩だとすれば、まずもって私たちには、歴史から学ぼうとする姿勢が欠かせない。過去から現在の流れがあつて、はじめて未来を展望することができる。変化をもたらす「主体」の立ち上がりを、歴史の中に読み取ってもらえればと願う。

本書の中心部分をなす第Ⅱ部と第Ⅲ部は、「人間の安全保障」の視点を意識して構成した。人間の安全保障は、「恐怖からの自由」(平和)と「欠乏からの自由」(開発)を一人一人に保障していくアジェンダである。現実には、平和にかかわるのは外交官や平和・人権NGOの仕事で、開発にかかわるのは企業、ODA関係者、開発NGOの仕事という分業が根を下ろしている。平和は平和、開発は開発という具合に、別々に理解される傾向があるのだが、これらの二つの領域は実は密接に関係している。そして、人間の安全保障を実践していこうとすれば、深刻な恐怖と欠乏にさらされる人びとを保護するとともに、自分たちの力で立ち上がろうとする人びとを側面から支えていくことが肝心になる。こうした認識は、第Ⅱ部と第Ⅲ部の執筆者全員に共有されていると思う。

立ち上がるのは誰だろうか。天を支えるのは半分は女性である。アフリカにおいては、社会の不安全にとくにさらされやすい階層としても、そして変化の主要な担い手としても、女性の役割が非常に大きい。アフリカの未来を考えるにあたってジェンダー的な側面に注意を払うことは、すべての執筆

者の共通の課題になっている。

第Ⅳ部は、アフリカと私たちの未来を実践的にどう展望するかを論じたセクションである。第Ⅳ部の執筆者をはじめとして、本書のすべての執筆者たちは、JICAやNGOの仕事にかかわった経験があるか、または今でも現役で仕事をしている人びとである。象牙の塔に閉じこもらず、実践の世界で悩んできた執筆者たちだからこそ、アフリカの現場から何を学べるかについて、自信を持って提案できることがあると思う。第Ⅳ部では、本書が「アフリカ研究」と「アフリカ実務」のコラボレーションの成果だということが、あらためて強調される。「アフリカを知る」というだけなら、学者の知見で事足りる。だが、「アフリカから学ぶ」ためには、人と人との生身の交流が欠かせない。本書の執筆者たちの現場感覚は、本書の大きな付加価値になっていると確信する。

それぞれの章の議論から何をくみとるかは読者次第だが、本書の繰めくりとして末尾には、編者三人の考えをまとめ、「いまアフリカから何を学ぶか」について論じた「おわりに」を設けた。言うまでもないことだが、アフリカで注目すべきは政治経済や貧困だけではない。本書では、文化や芸術、スポーツや社会生活にかかわる多彩な分野について、それぞれをよく知る皆さんにコラムを書いていただき、アフリカをより広く理解してもらえようにした。これらのコラムも楽しんでお読みいただければ幸いである。

* * *

日本でアフリカに関心を持つ人びとが増えているのは、一過性のブームではないと感じる。アフリカを知りたいと思う読者は多いのに、まだまだ情報の供給が追いついていないのが現状だろう。アフリカの過去、現在、未来を包括的に展望する本書のような入門書は、多くの読者にとって、アフリカ世界に本格的に触れる初めての本になるかもしれない。

そうであるからこそ、私たち編者は、それぞれの執筆者に十分に持論を展開してもらいながらも、全体としてバランスのとれたアフリカ論ができあがるように工夫したつもりである。有斐閣書籍編集第二部の渡部一樹さんには、本書の企画から編集作業の仕上げにいたるまで、しっかりと方向を示していただくとともに、執筆者の潜在的な力を引き出していただいた。心から感謝したい。

高見に立ってアフリカに何かを教えるのではなく、違いに驚き、学びあう。本書を通じて、そのよ
うなアフリカとの対等な関係を目指そうとする人たちが一人でも増えれば、編者としては非常に嬉し
い。

編者を代表して

峯 陽一

付記 「アフリカ」というと、「アフリカ大陸」を指す場合と、北アフリカを除く「サハラ以南アフリカ」を指す場合とがあるが、本書ではあえて統一せず、各執筆者の考え方に任せている。

目次

はじめに ————— i

第I部 歴史の中のアフリカ

第1章 アフリカの歴史から学ぶ——人間の「進歩」とは何だろうか ●峯陽一 3

1 広大なアフリカ——土地と人間を起点に考える 4

2 アフリカの国家のかたち 13

3 歴史の「進歩」とアフリカ 20

4 アフリカから学ぶ姿勢 24

第2章 アフリカの独立から五〇年——内側から見たアフリカの動態 ●吉田昌夫 31

1 アフリカ諸国の独立とは何だったのか 32

2 国づくりの希望と困難 38

3 一九八〇年代の経済困難と世界・IMF体制の構造調整政策 44

4 南アフリカ共和国のアパルトヘイト廃絶 50

5 ポスト構造調整の時代 55

第3章 アフリカ史と日本 ●青木澄夫 63

- 1 アジアとアフリカ 65
- 2 アフリカと日本人 74
- 3 アフリカ人が見た日本 84
- 4 期待される日本の若い力 90

第4章

アフリカ史を読み解く——女性の歩みから●富永智津子 97

- 1 先史時代（八〇〇年ごろまで） 98
- 2 西部～中部アフリカ 102
- 3 東部アフリカ 110
- 4 南部アフリカ 114
- 5 植民地時代から独立へ 118
- 6 新しい歴史の幕開け 122

第Ⅱ部 「平和なアフリカ」のために

第5章

冷戦後の紛争はなぜ起きたのか？——アフリカの紛争から学ぶ●武内進一 131

- 1 映画に見る冷戦後アフリカの紛争 131
- 2 どのような紛争が起きたのか 137
- 3 国家をめぐる紛争 142
- 4 平和に向けて 146
- 5 紛争を学ぶ、紛争から学ぶ 151

第6章 人道支援や平和構築の知恵——難民・避難民の視点で考える ●米川正子 157

- 1 難民・避難民に学ぶ 157
- 2 他者の経験を想像する 162
- 3 難民の安全 165
- 4 難民キャンプの安全 170
- 5 紛争解決に向けて 174

第7章 ルワンダにおける元戦闘員の社会復帰の試み——DDRと和解促進の関係 ●小向絵理 181

- 1 なぜ元戦闘員を支援するのか 181
- 2 紛争後のDDR（武装解除・動員解除・社会復帰） 182
- 3 ルワンダの紛争 184
- 4 ルワンダ動員解除・社会復帰プログラム 187
- 5 ルワンダにおける動員解除・社会復帰と和解の促進 195
- 6 DDRと和解 201

第8章 ジンバブウェ——「紛争国」の農村で暮らす人びと ●壽賀一仁 203

- 1 「紛争国」ジンバブウェ——報道と実像のギャップ 204
- 2 「紛争国」前史——土地と政治の民主化をもとめて 208
- 3 「紛争国」の一〇年——新たに生まれた農村の実相 214
- 4 「紛争国」から学ぶ——暮らしの場のコントロール 222

第9章 アフリカ農村再生への道——「コミュニティ」開発の可能性を探る ●花谷厚 227

- 1 「共用資源」の持続的利用と管理 228
- 2 アフリカ農村社会の「コミュニティ」性と資源管理 231
- 3 セネガルの動力式給水施設と運営・維持管理体制 233
- 4 事例一 K村の場合 240
- 5 事例二 D村の場合 245
- 6 アフリカ農村社会と共用資源管理 250

第10章 アフリカ経済は持続可能か——資源、製造業、南アフリカ ●西浦昭雄 263

- 1 世界経済とアフリカの資源 265
- 2 アフリカ製造業の可能性 273
- 3 南アフリカは牽引力となれるのか 280
- 4 アフリカから学ぶ 285

第11章 アフリカの教育と子どもたちの未来 ●横関祐見子 289

- 1 アフリカ地域の教育の遅れ 290
- 2 何がアフリカの教育開発を遅らせているのか 294
- 3 アフリカの多様な学びの場 299

4 アフリカの未来と教育の意味 304

第12章 エイズとともに生きる人びと——アフリカの連帯●徳永瑞子 313

- 1 音のない戦争——アフリカを襲った感染症HIV 314
- 2 臨床の現場から——エイズと戦う患者たち 316
- 3 世界基金——エイズ「死の恐怖」からの解放 322
- 4 マイクロレジット——経済的に自立を始めたHIVエイズ患者たち 331

第IV部 アフリカの二一世紀——新しい関係をめざして

第13章 分権化と社会——東アフリカからのメッセージ●笹岡雄一 341

- 1 もともと分散的な社会 344
- 2 パートナーシップの関係 355
- 3 新しい人びとの関係 362

第14章 変貌するアフリカ市民社会と日本の私たち ●船田クラークンさやか 367

- 1 私たちの中の「アフリカ」と実際のアフリカ 367
- 2 アフリカ市民社会の現状と変化 372
- 3 開発分野のアフリカ市民社会組織の変遷 376
- 4 二〇〇八年に向けたアフリカと日本の市民社会間の連携における成果と課題 383

第15章 アフリカに求められている援助とは？ ●黒川恒男 399

- 1 変化するアフリカ 400
- 2 アフリカ援助の過去を振り返る 404
- 3 日本のアフリカ援助 408
- 4 今後のアフリカ援助とは 412

おわりに——「アフリカから学ぶ」ということ—— 421

索引／欧文略語一覧

コラム一覧

- ① 呪術化する現代アフリカ ●近藤英俊 28
- ② イスラムを通して支え合うアフリカ社会 ●内山智絵 60
- ③ 現代アフリカ文学の巨人グギ・ワ・ジオングの軌跡 ●宮本正興 94
- ④ 多言語社会からの問いかけ ●竹村景子 126
- ⑤ 世界で評価されるタンザニアの美術 ●金山麻美 154
- ⑥ 歌って踊られて、働くアフリカ人 ●鈴木裕之 178
- ⑦ ケニアのマラソン選手の強さの秘密 ●関 幸生 258
- ⑧ サッカーから見えてくるアフリカの諸相 ●関 幸生 260
- ⑨ 日本でたくましく生きるアフリカ人 ●和崎春日 336

執筆者紹介（執筆順）

峯 陽一 みね よういち 同志社大学グローバル・スタディーズ研究科教授、国際協力機構（JICA）研究所客員研究員 第1章

主著：『南アフリカを知るための60章』（編著、明石書店、2010年）
『現代アフリカと開発経済学』（日本評論社、1999年）

吉田 昌夫 よしだ ますお

日本アフリカ学会評議員 第2章
主著：『東アフリカ社会経済論』（古今書院、1997年）
『アフリカ現代史Ⅱ 東アフリカ』（山川出版社、2000年）

青木 澄夫 あおき すみお

中部大学国際関係学部教授 第3章
主著：『放浪の作家安藤盛と「からゆきさん」』（風媒社、2009年）
『日本—アフリカ交流史』（『アフリカ学入門』明石書店、2010年、所収）

富永 智津子 とみなが ちづこ

元宮城学院女子大学教授 第4章
主著：『ザンジバルの笛』（未來社、2001年）
『スワヒリ都市の盛衰』（山川出版社、2008年）

武内 進一 たけうち しんいち

国際協力機構（JICA）研究所上席研究員 第5章
主著：『現代アフリカの紛争と国家』（明石書店、2009年）
『戦争と平和の間』（編著、アジア経済研究所、2008年）

米川 正子 よねかわ まさこ

宇都宮大学国際学部特任准教授 第6章
主著：『世界最悪の紛争「コンゴ」』（創成社、2010年）
『Part of the System』(in *Volunteers Against Conflict*, United Nations University Press, 1996)

小向 絵理 こむかい えり

国際協力機構（JICA）国際協力専門員 第7章
主著：『紛争予防の視点からのアセスメント』（『開発と平和』有斐閣、2009年、所収）
『平和構築と良い統治』（共著、『国際協力論を学ぶ人のために』世界思想社、2005年、所収）

す 賀 一 仁
かずひと

一般社団法人あいあいネット理事 第8章

主著：『シンパフウェ黒人小農の現在』（『アフリカレポート』第四〇号、二〇〇五年）

「行政に依存しない実施体制」（IDCI forum）第二号、二〇〇二年）

はな 花 谷 厚
はなた あつし

国際協力機構（JICA）研究所上席研究員 第9章

主著：『貧困削減戦略体制下におけるアフリカの地方開発』（『アフリカの人間開発 みんなく実践人類

学シリーズ二）明石書店、二〇〇八年、所収）

にし 西 浦 昭 雄
にしほ あきお

創価大学学士課程教育機構教授 第10章

主著：『南アフリカ経済論』（日本評論社、二〇〇八年）

Industrialization and Poverty Alleviation（共著・UNIDO, 2006）

よし 横 関 祐 見 子
よしむら ゆみこ

国連児童基金（UNICEF）中西部アフリカ地域事務所・教育アドバイザー 第11章

主著：『国際教育開発論』（共編著、有斐閣、二〇〇五年）

「アフリカ地域における教育協力の動き」（『アフリカの開発と教育』明石書店、二〇〇三年、所収）

とく 徳 永 瑞 子
とくなが みすじ

聖母大学看護学部教授 第12章

主著：『シンギラミンギ』（サンパウロ、二〇〇一年）

「これは本当のアフリカのお話です」（青海社、二〇〇九年）

ささ 笹 岡 雄 一
ささおか ゆういち

国際協力機構（JICA）研究所上席研究員 第13章

主著：『Does Universal Primary Education Policy Weaken Decentralisation?』（共著、Compare, 40(1), 2010）

「ウガンダの分権化と貧困削減」（『地域研究』第九巻第一号、二〇〇九年）

く 船 田 ク ラ ー セ ン さ や か
ふなだ

東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授 第14章

主著：『アフリカ学入門』（編著、明石書店、二〇一〇年）

『モザンビーク解放闘争史』（御茶の水書房、二〇〇七年）

くろ 黒 川 恒 男
くろかわ へいお

国際協力機構（JICA）理事長室長 第15章

主著…「新たなアフリカと日本の関係構築に向けて」(『日本貿易会月報』二〇〇八年四月号)

「南アの開発と日本企業の役割」(『日立総研』二〇〇九年三月号)

コラム執筆者

近藤 英俊 こんどう ひでとし 関西外国語大学外国語学部特任准教授 コラム①

内山 智絵 うちやま ちえ 青年海外協力隊 コラム②

宮本 正興 みやもと まさおき 中部大学国際関係学部教授 コラム③

竹村 景子 たけむら けいこ 大阪大学世界言語研究センター准教授 コラム④

金山 麻美 かなやま あさみ タンザニア在住 コラム⑤

鈴木 裕之 すずき ひろゆき 国士舘大学法学部教授 コラム⑥

関 幸生 せき ゆきお 日本陸上競技連盟・事務局事業部専任課長 コラム⑦⑧

和崎 春日 わさき はるか 中部大学国際関係学部教授 コラム⑨

おわりに——「アフリカから学ぶ」ということ

ぶらり一人旅だったり、命じられた仕事だったり、自分の研究のための調査だったりするが、私たちがアフリカに通い始めると、すぐにいろいろなことに驚かされる。

たとえば、人びとが裸足で歩いている。警官に金を巻き上げられ、空港でカメラを没収されかける。おばさんが道ばたで大きな洗面器にノートを並べ、大輪のヒマワリのようにして売っている。役所を訪問すると、受付嬢がラジオを聞きながら編み物をしている。大統領が前任者の呪いを恐れて公邸に住まない。初めて行った村で「泊めてほしいんだけど」と言うと、当然のように歓待してくれる。電気がない村なのに、夜になるとダンスミュージックが鳴り響き、皆嬉しそうに踊り明かす。「こんな日本では、ありえないよなあ」と感じることはかりだ。

《私たちとは違う世界》、というのは、確かにアフリカが見せる一つの顔だ。そこには極度の貧困や武力紛争の頻発があり、きわめて非効率な政府機構があり、呪術がなお多大な影響力を持ち、音楽が人びとの生活の中で根源的な重要性を持っている。

その一方でアフリカは、《私たちと同じ世界》という別の顔も、確実に見せてくれる。アフリカで暮らす人びとと接し、対話していくうちに、私たちは、アフリカの人びとと自分たちの共通性にも

徐々に気づかされていく。客人を歓待する心、義理を重んじる心、思っていることを全部は言わない心、自分を良く見せたいと願う心。「これって、同じだよなあ」と納得することが、実は多い。アフリカには素晴らしい人や偉大な人がいる。そして、つまらない奴や嫌な奴がいる。日本と同じである。アフリカとの関係が深まっていくにつれて、私たちはあらためて、こういう当たり前のことも自覚していくようになる。

* * *

一〇年ほど前、鹿児島県の島で選挙をめぐる乱闘が起こったことがある。住民を二分した激しい選挙が争われる土地で、選挙に勝った陣営が町役場のポストを独占して公共事業を発注する。島の経済は公共事業に深く依存し、島民の多くはその関連の仕事で生計を立てているから、選挙の帰趨が生活を大きく左右しかねない。この島で選挙が毎回のように過熱する背景には、そうした事情があった。この種の事件に接すると、衝突にいたるメカニズムがアフリカの紛争と酷似していることに驚かされる。近年のアフリカで、選挙が騒乱のきっかけになるケースは少なくない。二〇〇七年末の大統領選挙の結果をめぐる暴動となり、一〇〇〇人を超える犠牲者を出したケニアの例は記憶に新しい。こうした紛争の背景には、選挙に勝利した陣営が政府の重要なポストを独占し、そこから生まれる利得を排他的に利用するという構造がある。

アフリカの場合、選挙に打って出る有力政治家をトップとする各陣営は、エスニック集団（部族）

と重なることが多い。ケニアの騒乱でもキクユ人とルオ人の衝突が盛んに報じられたが、紛争でエスニック集団同士が衝突するように見えるのは、その背景に利権を分配する構造があるからだ。エスニック集団が違うから衝突するのではなく、有力な政治家を頂点とする利権配分のネットワーク同士が衝突しているのである。

公共事業に深く依存し、役場など公的機関が利権配分に決定的な役割を果たす地域は、何も鹿児島県の島嶼部に限らず、日本の全土に数多く存在する。一方、アフリカの国々ではおしなべて、国民経済の中で政府が扱う資源がきわめて重要な位置を占めている。そこに発生する紛争のメカニズムを考えていくと、アフリカと日本に共通する政治と経済の関係が見えてくるように思う。

もう一つ例をあげよう。コラムでも取り上げたが、アフリカにおいて呪術は大きな意味を持っている。日常生活でもそうだし、政治でもそうだ。ザイル（現コンゴ民主共和国）を三〇年以上にわたって支配したモブツは、主要官庁の予算に匹敵する規模のお金を支払って呪術師を雇い、超自然的な力を身につけるために人の血を飲んだと言われる。近年のアフリカ研究では、近代化の中で呪術が再興する現象についての研究が盛んである。

一方、日本のある夕刊紙の報道によれば、二〇〇五年のいわゆる郵政選挙に際して、郵政民営化に反対して自民党を離脱したグループは、熊野本宮大社が発行した誓紙「牛王宝印（ごおうほういん）」に署名し、結束を誓ったという。これは血判状の正式な作法で、誓いを破ると熊野の守り神である八咫鳥（ヤタガラス）が一羽死に、破った本人も血を吐いて地獄に落ちるとされている。

日本とアフリカがまったく同じだというわけではない。アフリカの紛争ははるかに暴力的だし、呪術はもつと強烈なりアリティを持っている。ここで提案したいのは、アフリカで起こる出来事を、日本ではありえない、自分とは関係ないものだとはとらえずに、自分の周りをよく観察してみよう、ということである。

日本とアフリカ諸国の状況は大きく異なるし、そこに住む人びとを取り巻く環境も大きく違う。だが、両者は決して断絶も隔絶もしていない。先にあげたいいくつかの例が示すように、アフリカと日本では、一人一人の人間性だけでなく、人びとが生きていく社会の環境にもまた多くの共通点がある。私たちにとってアフリカは、自分を知る鏡のようなものではないだろうか。

* * *

もちろん、日本とアフリカに大きな違いがあるのは当然のことである。本質的に同じ問題だけれどもアフリカの方がもつと深刻である、という違いを考えるなら、まずはアフリカと日本の「生きやすさ」の違い、あるいは「生の安全」の違いをあげることができる。アフリカの人びとは、自分には責任のない災難に見舞われることで、ときに生き方の幅を大きく狭められてしまうことがある。エイズや武力紛争の事例は目立つが、そうでなくても、犯罪や交通事故に巻き込まれたり、ちょっとした病気が悪化したりして命を失う友人や知人の話を、アフリカとのつながりが深まるにつれて、私たちはよく聞くようになる。仕事をクビになったり、一家の稼ぎ手を失ったりして路頭に迷う人たちも、ア

フリカのあちこちにいる。

冒頭の歴史の章では、思いがけない災厄に見舞われる人びとの存在を気にかけて、そうした不幸をできるだけ減らしていく集合的な努力が「歴史の進歩」なのではないか、という視点が提示された。無制限に幸福の総量を増やしていくのではなく、「最小不幸社会」を目指すという考え方は、二〇一〇年六月に首相に就任した菅直人氏が言及したことで、日本でもよく知られるようになった。そのような実践を日本社会の内部に閉じ込めるのではなく、連帯と相互扶助の範囲をフリカの人びとにまで拡大していく実践は、自然なことであり、今まさに求められていることである。

しかし、ここにおいてもまた、財と知識を持つ日本が財と知識を持たないフリカを助ける、という一方的な構図は、必ずしも成立しない。フリカで起きていることを「わがこと」ととらえる者たちは、自分の財と時間を犠牲にし、知識を提供し、心を込めて、フリカの人びとと向かい合おうとする。だが、そのような実践者たちも、やはり最後にはフリカから多くのものを受け取って、フリカを後にすることが多い。

考えてみよう。日本では毎年三万人が自殺で命を絶つ。しかし、フリカで自殺はきわめて稀だし、二〇一〇年のフリカには、年間三万人が犠牲となるような武力紛争などどこにも起こっていない。教育の章の言葉を借りるなら、私たちはフリカでときに「極限の状況」に遭遇する。しかし同時に、エイズの章の筆者が言うように、そのような状況にあるフリカは、「生きるとは何か」という真の答えを見いだせる」ところでもある。そして、市民社会の章の筆者が述べるように、そうした中で尊厳

と優しさとユーモアを持って生きている人びとを見るにつけ、私たちはしばしば、彼らと彼女たちの「人間力」に圧倒される。

私たちもアフリカに何かを与えることができればと願う。だが、相互のつながりの中では、どちらかと言えば、私たちがアフリカからもらうことの方が多いのかもしれない。それは、アフリカの人びとが自分たち自身の人生を生きているからであり、アフリカそのものの内部に、自分たちの環境を改善しようとするたくましい動きがあるからではないだろうか。

* * *

アフリカと日本の関係は、固定的なものではない。日本は動いているし、アフリカも動いている。一九六〇年という年は、アフリカ大陸の一七の国々が一挙に独立したことで、「アフリカの年」と呼ばれる。それから五〇年が経過したが、アフリカの国家は概してまだ若く、政府が公共の利益のために行えることには限りがある。だが、その分だけ、アフリカでは政府の外でも数多くのアクターが働いていることに注目したい。

そこには諸外国のアクターも含まれる。アフリカは大量の援助を受け入れているから、外部に門戸を開放せざるをえないところがある。植民地支配の遺産もある。しかし、アフリカ人が外部の力におとなしく従っているとは限らない。たとえば、援助慣れしているタンザニアの援助国会議では、タンザニア政府の関係者が、外国の援助機関をあたかも一つのエスニック集団のようにあしらう光景が見

られる。植民地化の時代にも独立を守り続けたエチオピアの会議では、援助国の振る舞いに政府関係者が警戒心を隠さない。表の顔と裏の顔を使い分けながら援助国の代表と渡り合うアフリカ人たちの姿には、頼もしささえ感じるときがある。

近年では、民間部門もアフリカの重要なアクターになりつつある。経済の章が論じているように、外国企業のアフリカへの直接投資や貿易は増えているが、それらは今のところ、アフリカの人びとの雇用の拡大にはあまり貢献していないようだ。アフリカが急速に成長しているのは、中国やインドなどの新興工業国が資源を大量に買いつけているからである。しかし、アフリカを含む世界の途上国は、互いに競合する一次産品を大量に輸出している。新興工業国の需要が減速したら、アフリカの経済は破滅的な影響を受けてしまうだろう。アフリカがより持続的な発展を遂げるには、社会の中間層が厚みを増し、農村がより豊かになり、域内貿易が発達していく必要がある。

外国企業も少しずつアフリカの社会に目を向けるようになってきた。南アフリカではトヨタ自動車が出産し、その家族向けに積極的なエイズ対策を行い、イギリスの菓子メーカーのキャドバリーがガーナの 카카오生産地でコミュニティ開発に取り組んでいる。フェアトレードによる地域の振興や環境保全の取り組みも、具体的になってきた。

アフリカの変化のアクターとしては、市民社会の役割も大きい。現地の NGO、労働組合、協同組合、政党、政治的なフォーラムなど、そこには多彩な担い手たちがいる。これらのアクターに、日本を含めた世界の市民社会が声援を送ることも大切ではないだろうか。独立した新聞やラジオなどのマ

スメディアやインターネットにも注目したいし、サッカーなどのスポーツも私たちの垣根を取り払ってくれる。日本のごく普通の市民が、アフリカの人びと、それも都市部のお金持ちだけではなく、農村地域の人びととも経験を共有し、手を結べるようになればよいと願う。

アフリカの多様なアクターの中でとくに存在感が強いのが、女性たちである。ときにフォーマルすぎる男たちの建前論をひっくり返し、たくましく議論を方向づけていく。都会を歩くと、女性たちがカラフルな衣装をまとい、自信たっぷりに商売している姿をよく見かける。農村に行くと、場所にもよるが、女たちが勤勉に働いて、男たちは昼間から地酒のビールを飲んでいることがある。

独立後、アフリカ諸国の多くは一党支配のもとにあった。アフリカの独裁的な支配階層は、アジアの「開発独裁」とは違って、国民経済のパイを増やすことにはあまり関心を示さず、既存の富を内輪だけで再分配しようとする傾向があった。紛争に関する諸章が論じているように、アフリカではとりわけ一九九〇年代、独裁から民主主義への移行期において、激しい内戦やエスニック紛争、人道危機が頻発した。アフリカの内外の多くの人びとが、このような悲劇を繰り返し返してはいけないという認識を共有している。

アフリカが平和で豊かな未来を達成するためには民主主義を定着させることが大切だが、民主主義は公正な選挙や法の支配を越える、それ以上の何ものかである。ここでスケッチしてきたような多様なアクターが、ときに力を合わせ、ときに互いを批判し、ときに利害を調整しながら、よりよい「ガバナンス」（統治や協治のあり方）を模索していくことがアフリカに求められているのである。そし

て、そのような取り組みはすでに始まっている。

独裁と貧困と紛争の時代、アフリカは疲れ切っているようにも見えた。だが、一九九〇年代の移行期から二〇〇〇年代に入り、少しばかり様子が変わってきた。国家の役割に限界があることが認識されるとともに、中央や地方の政府が民間部門や市民社会の多様なアクターと新たなパートナーシップを結んでいく方向へと、アフリカはゆっくりと舵を切りつつあるように思える。植民地化以前のアフリカ社会が概して著しく分権的であったことを考えると、これは歴史的にも自然な流れかもしれない。考えてみると、日本の社会も、実はまったく同じ構図の課題に直面しているのではないだろうか。

利権配分にメスが入るようになった。政府にすべてを任せるわけにはいかない。企業利益の論理だけでなく社会がもたない。市民社会の組織化と親密圏の相互扶助だけでは自己統治の大きな枠組みがつかれない。しかし、社会の合意として姿をあらわすパートナーシップの具体的な形は、日本とアフリカでは異なってくるだろうし、アフリカの内部でもさまざまであろう。共通の課題があり、道の多様性があるからこそ、私たちは互いに学ぶことができると思うのだが、どうだろうか。

* * *

他者を知ること、自分を知ることでもある。アフリカと接し、我彼の違いや共通性に驚く感性を持ち続けることで、自分たちが生きている日本の社会が相対化され、その仕組みが見えてくる。そのことによって、私たちは、アフリカの社会をまた違った角度からとらえていくことができる。地域研

究と呼ばれる学問分野を特徴づけるのが、こうした往復運動にほかならない。

アフリカと日本。それぞれの立場は固定的なものではなく、相手は変わり、私たちも変わる。それでも、人びとの「生きにくさ」から目をそらさずに、よりよい社会をつくっていくという骨太な課題そのものは、両者に共通しているのではないだろうか。「学び」と「学びあい」を深め、さらに加速させていくための素材として、本書を多くの読者に役立ててもらえたら嬉しい。

二〇一〇年八月

武内 進一

笹岡 雄一

峯 陽一



アフリカから学ぶ
Learning from Africa

2010年9月15日 初版第1刷発行

編者 峯陽一
武内進一
笹岡雄一
発行者 江草貞治

東京都千代田区神田神保町 2-17
発行所 株式会社 有斐閣

電話 (03) 3264-1315 [編集]

(03) 3265-6811 [営業]

郵便番号 101-0051

<http://www.yuhikaku.co.jp/>

印刷・萩原印刷株式会社／製本・牧製本印刷株式会社

©2010, Yoichi Mine, Shinichi Takeuchi, Yuichi Sasaoka.

Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★定価はカバーに表示してあります。

ISBN 978-4-641-04986-4

JCOPY 本書の無断複写(コピー)は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に、(社)出版者著作権管理機構(電話03-3513-6969, FAX03-3513-6979, e-mail:info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。